

註記 千早 正朝師

遺族焼香

來會者一同禮拜

追悼文 男爵 濱尾 新氏

追悼文 男爵 九鬼 隆一氏

追悼文 門人總代 横山 大觀氏

以上

當日來會者は總て百九十二名、遺族としては、令夫人もと子、令嗣一雄、令弟由三郎等の諸氏、九鬼男爵の追悼文は黑板（勝美）博士代讀せられ、講師法隆寺貫主佐伯大僧正以下の四師は、態々奈良縣法隆寺より上京せられたるなり。

次で佐伯大僧正の表白文と大西大僧正の啓白文、浜尾、九鬼（代読）、横山の追悼文が掲載されており、式後、精養軒で晚饗会が開かれ、百余名が出席し、正木直彦の挨拶、三上参次、有賀長雄、三宅雄二郎（雪嶺）の追憶談、黒板勝美による記念事業計画の提案（万場一致可決）、岡倉由三郎の謝辞等があったと記されている。昭和六年に至り、本校校庭に平櫛田中原型の岡倉天心銅像が建てられた。

⑤ 依嘱製作中央停車場壁画

年報（32頁）に記載されているとおり、大正二年、本校は鉄道院東京改良事務所より中央停車場（大正三年十二月十八日開業式挙行。東京駅と命名される。）の壁画製作を依託された。「大正二年 職員ニ関スル書類 庶務掛」によると、同年三月、黒田清輝に「中央停車場本

屋中央広間壁画工事監督」を囑託したい旨、鉄道院より文部省に照会があり、次いで文部省より本校へ照会があつて、本校の依嘱製作事業の一環として行ふことになったことがわかる。完成は翌三年八月で、その翌月に発行された『美術新報』第十三卷第十一号に和田英作の「竣工したる中央停車場の壁画」と題する報告が載っている。それによると、黒田は「山の幸」「海の幸」というテーマで鉄道院側が用意した下図に対し、一応そのテーマに倣つて別の案を立て、大正二年秋に下図を描き（東京国立文化財研究所所蔵の写生帖にその画稿があり、『黒田清輝日記』第三卷。（昭和四十二年。中央公論美術出版）に図版が掲載されている）、それをもとに和田英作と西洋画科卒業生の田中良および五味清吉が手分けして材料を集め、大正三年正月に五分の一の下図を作り、同年三月頃からモデルを使って現画（油画）の製作に取り掛つた。七月末に「山の幸」を意味する「機関手」「農業」「鉱業および林業」「工業」「操車」と「海の幸」を意味する「舵手」「水産」「運輸および造船」「漁業」「水難救助」の油画十点が完成し中央ホールの奥の室に取り付けられという。同誌にはそのうち六点の図版が掲載されている。この壁画は戦災で焼失した。

⑥ 『法隆寺大鏡』

大正二年十一月から本校は『法隆寺大鏡』の刊行を始めた。美術の宝庫たる法隆寺の研究、記録のために率先して大図録を編集刊行することを決定した本校は、黒板勝美、三宅米吉、今泉雄作、中川忠順、溝口禎次郎らを顧問に迎え、白石村治を編集事務囑託とし